



かかわりで「更新」される本人らしさ 尊重し、真摯に向き合う

「本人らしさ」とは、いったい何だろうか。そして、相談援助職であるケアマネジャーが、本人らしさを掘み、ケアに生かすにはどうすればよいのだろうか。ADLやIADLだけでなく、文化的日常生活活動・行為（CADL）から自分らしさを尊重した支援を提唱する高室しげゆき氏、宅老所「よりあい」をはじめとした施設で「本人の当たり前の願いや生活をできるだけ支援する」をモットーに利用者に寄り添ってきた村瀬孝生氏、認知症専門相談員やケアマネジャーとして多くのケースを経験し、認知症専門サービス運営してきた右馬埜節子氏が語り合った。

参加者 ▶

高室しげゆきさん ● 次世代ケアマネジメント研究会 副理事長
日本ケアマネジメント学会 会員
ケアタウン総合研究所 代表

村瀬孝生さん ● 特別養護老人ホーム「よりあいの森」、
「宅老所よりあい」、
「第二宅老所よりあい」統括所長

右馬埜節子さん ● 認知症専門相談員

いま、「本人らしさ」を問い直すとき

高室 私はケアマネジャーによる「本人らしさ」を叶える支援について、課題が多いと思っています。介護保険制度でもケアマネジャーも言葉では利用者本位と言っています。しかし、私がケアプランの指導をしていると、「何歳で要介護度はいくつで、こういう疾患がある」というような、身体状態やADLのアセスメントまでは詳しくするけど、その先をなかなか掘り下げてない。この人は何が好きなの？と尋ねても、出てこない。ICFの個人因子があまりにも把握できていないですね。だから、個別性のない似たようなケアプランがたくさんできてしまう。加えて、生産性向上の名の下、ICT化や効率化で、プランのワンパターン化とテンプレート化が進んでしまっています。だからこそいま改めて、「本人らしさ」に注目する時ではないでしょうか。本人らしさを尊重する支援の方法と

して私は、ADLやIADLに加えてもう1つ「CADL^{*1}」を提唱しています。CADLのCは、カルチャー。文化です。日常生活で行う本人の文化的な活動や生活行為と要素に大胆に着目して、本人らしさを支援する理論です。そこで、これまで長年実践をされてきたお二人に、「本人らしさ」をどのように捉えていらっしゃるか、からお聞きしたいと思います。

相談援助職が「らしさ」を掘むには、「一人しか産んでいません」の真意

村瀬 1つには、その人の生育歴から来ていると考えます。幼少期やご主人との関係、子どもとの関係……というように、その時々で自分がどのように振舞ってきたのか、まるでミルフィーユのように層が重なって、その人の生き方になっています。一方で、過去の振る舞いや関係性だけではなく、今、あなたと

私が初めて出会って、今までの振る舞いをしながらも、また「新しい私」が立ち上がっていくという面もあります。本人らしさは過去に固定化されているのではなく、いくつになっても常に更新されていくものだと考えます。

右馬埜 本人らしさとは、個性や人格だと思います。体質や体格など持って生まれたものに、育った地域や時代、親との関係などの環境、職歴や恋愛などの成育歴がプラスされて育まれたものが、本人らしさだと思うんです。村瀬さんのおっしゃるように、相手の人格と触れ合うと変わる部分もあります。それも全部含めて、本人らしさですよ。

高室 「その人らしさ」という表現に私はとても違和感を持っています。これは支援者側の言葉、安易なラベリングだなと思うんですね。「その人」を決めているのは支援者です。利用者さんを服装やしぐさやしゃべり方、印象だけで勝手に決め